

友好都市提携30周年記念特集

川崎市は1990年7月30日に、英国・サウス・ヨークシャー州にあるシェフィールド市と友好都市提携を結び、その後も川崎市民交流団の訪問などで交流を重ねてきました。なかでもシェフィールド大学(国立)は6名ものノーベル賞受賞者を輩出したのもうなずける、先生も学生の皆さんもとても素晴らしい大学でした。

今号では友好都市提携30周年を記念して、シェフィールド大学のコックレル 有紀先生とティム先生に、誌面上でご案内していただきます。さあ、一緒にシェフィールド市を訪れてみましょう。



川崎市民交流団とシェフィールド大学生との交流

英国・シェフィールド市

シェフィールド市は人口約57万人(2016)、面積367.9km²の北イングランドの都市で、イギリス(英国)の背骨とも言えるペナイン山脈の東麓、国土のほぼ中心に位置しています。この地名の由来となったシェフ川とドン川の合流する辺りを中心に発展し、「七つの丘の上に建てられた町」とも言われる起伏に富んだ地形が特徴で、谷間には急流や小川などが至る所にあります。この環境を見ると、今のシェフィールドの特徴もよくわかります。



ペナイン山脈とシェフィールド/ブリテン島の地形図



7つの丘の上に建てられた町

イングランドで一番大きな村

イギリス第5の都市の割に、町の中心部は意外に小規模です。その代わり、郊外に行くとエリアごとにそれぞれ「ヴィレッジ(村)」風のセンターがあります。このようなエリアの多くは特に市の西側に集まっています。坂が多く、豊かな緑に囲まれています。



「イングランドで一番大きな村」と呼ばれる所以です。また、シェフィールドは市内に250以上の自然公園や公共の緑地、森林があり、その樹木の多さから「イギリスで最も緑(木)の多い都市」とも言われています。80の天然林や180の森が点在し、コロナ禍の半ロックダウン的な生活が続く中でも多くの市民の癒しの場となっています。

鉱石から緑の木々へ

200年前の様子は今と全く違っていました。当時は、非常に小さな町で、丘陵地帯では石炭やガニスター(耐火性の強い岩石で、竈や炉の一部に使用)などの鉱石や硬くてキメの粗い砂岩(道しるべや回転式の砥石に使用)などが採れ、川や小川からの水源を動力として、刃物の鍛造や研削を行っていました。シェフィールドはこのような自然の恩恵を受けて、ごく小さな田舎町から、世界的にも重要な産業革命の中心地となっていきました。産業革命初期の建物で現存する物も多く、当時の勢いを偲ぶことができます。この期間に町の人口は3倍にも増え、町が拡大し、近隣の村々を吸収していった結果、現在のような郊外エリアができあがりました。当時のシェフィールドの実業家の一人、ジョージ・ウースンホルム(George Wostenholm)という人がアメリカ開拓者のナイフとして知られる「ボウイナイフ」の生産を始め、シェフィールド産のこのナイフはアメリカへ輸出され、大人気となりました。出張で米ニューイングランドを訪れたウースンホルムは、当地の木々や緑地に非常に感銘を受け、シェフィールドに戻ってから市の西側に新しく広がり始めた郊外を同じようなデザインにするよう働きかけました。このお陰で、今日のシェフィールド郊外は木々の緑豊かな姿となりました。



シェフィールドの西側にある郊外の一つ、ワーロー Whirlow。背景にシーフ谷を望む。写真左上にうっすらとシティセンターが見える。

変わらない原野(ムーア)

産業革命の前、中世の時代に、シェフィールドには北イングランドで最大級の城がありました。その城跡は、今では残っていません。

が、歴代の城主たちは領内の多くの丘や谷を整備して、鹿狩りや羊の放牧を行いました。今のシティーセンターがある辺りで、猟場も今では残っていませんが、高台の泥炭地(ムーアランドと呼ばれる)の多くは、所有者は変わっていったものの、ライチョウの狩場としてその姿を留めています。何世紀もの間、狩場として土地管理が行われたことにより、現在も当時のままの原野がそのまま残されています。小さな集落や石碑など何千年も前に造られたものを、今も目にすることができます。



シェフィールド西部の原野に立つ青銅器時代(紀元前)の立石

工業都市から学術都市、多文化都市へ

かつての工業都市としての姿は、実は今は過去、町の経済の様相も一変、現在のシェフィールドは国内でも有数の学術都市として2つの大学とその附属病院や研究所関連の雇用が市の経済に大きく貢献しています。また、市内では150もの言語が使用されるなど、多言語・多文化都市としての顔も持っています。



ウェストン公園とシェフィールド大学のアーツタワー(右奥)

(写真撮影/地図作成 Tim Cockrell)



著者:コックレル有紀&ティム

コックレル 有紀 先生

岡山県出身。シェフィールド在住歴26年。シェフィールド大学芸術・人文学部東アジア学科勤務(日本語教育)。川崎市との出会いは10年前の友好都市提携20周年記念の際の川崎市民交流団によるシェフィールド市訪問でした。シェフィールド大学の学生との交流会や、シェフィールドの継承日本語プレイグループのための邦楽公演・ワークショップなど懐かしく思い出しています。

ティム・コックレル(Tim Cockrell)先生

英国人。考古学者(先史考古学・景観考古学)。